# 身のまはり

芥川龍之介

## 一　机

僕は学校を出た年の秋「芋粥（いもがゆ）」といふ短篇を新小説に発表した。原稿料は一枚四十銭だつた。が、いかに当時にしても、それだけに衣食を求めるのは心細いことに違ひなかつた。僕はそのために口を探し、同じ年の十二月に海軍機関学校の教官になつた。夏目（なつめ）先生の死なれたのはこの十二月の九日（ここのか）だつた。僕は一月六十円の月俸を貰ひ、昼は英文和訳を教へ、夜（よる）はせつせと仕事をした。それから一年ばかりたつた後（のち）、僕の月俸は百円になり、原稿料も一枚二円前後になつた。僕は

これらを合せればどうにか家計を営(いとな)めると思ひ、前から結婚する筈だつた友だちの姪(めい)と結婚した。僕の紫檀(したん)の古机(ふるづくゑ)はその時夏目先生の奥さんに祝(いは)つて頂いたものである。机の寸法は竪(たて)三尺、横四尺、高さ一尺五寸位であらう。木の枯れてゐなかつたせゐか、今では板の合せ目などに多少の狂ひを生じてゐる。しかしもう、かれこれ十年近く、いつもこの机に向つてゐることを思ふと、さすがに愛惜(あいじやく)のない訣(わけ)でもない。

## 二　硯屏(けんびやう)

僕の青磁(せいじ)の硯屏(けんびやう)は団子坂(だんござか)の骨董屋(こつとうや)で買つたものである。尤(もつと)も進んで買つた訣(わけ)ではない。僕はいつかこの硯屏のことを「野人生計事(やじんせいけいのこと)」といふ随筆の中に書いて置いた。それをちよつと摘録(てきろく)すれば——

或日又遊びに来た室生(むろふ)は、僕の顔を見るが早いか、団子坂の或骨董屋に青磁の硯屏(けんびやう)の出てゐることを話した。

「売らずに置けといつて置いたからね、二三日中(うち)にとつて来なさい。もし出かける暇(ひま)がなけりや、使でも何(なん)でもやりなさい。」

宛然(ゑんぜん)僕にその硯屏を買ふ義務でもありさうな口吻(こうふん)で

ある。しかし御意通りに買つたことを未だに後悔してゐないのは室生のためにも僕のためにも兎に角欣懐といふ外はない。

この文中に室生といふのはもちろん室生犀星君である。硯屏はたしか十五円だつた。

## 三　ペン皿

夏目先生はペン皿の代りに煎茶の茶箕を使つてゐられた。僕は早速その智慧を学んで、僕の家に伝はつた紫檀の茶箕をペン皿にした。（先生のペン皿は竹だつ

た。）これは香以の妹婿に当たる細木伊兵衛のつくつたものである。僕は鎌倉に住んでゐた頃、菅虎雄先生に字を書いて頂きこの茶箕の窪んだ中へ「本是山中人　愛説山中話」と刻ませることにした。茶箕の外には伊兵衛自身がいかにも素人の手に成つたらしい岩や水を刻んでゐる。といふと風流に聞えるかも知れない。が、生来の無精のために埃やインクにまみれたまま、時には「本是山中人」さへ逆さまになつてゐるのである。

## 四　火鉢

小さい長火鉢（ながひばち）を買つたのもやはり僕の結婚した時である。これはたつた五円だつた。しかし抽斗（ひきだし）の具合（ぐあひ）などは値段よりも上等に出来上つてゐる。僕は当時鎌倉の辻（つじ）といふ処に住んでゐた。借家（しやくや）は或実業家の別荘の中に建つてゐたから、芭蕉（ばせう）が軒（のき）を遮（さへぎ）つたり、広い池が見渡せたり、存外（ぞんぐわい）居心地のよい住居（すまひ）だつた。が、八畳二間（ふたま）、六畳一間（ひとま）、四畳半二間、それに湯殿（ゆどの）や台所があつても、家賃は十八円を越えたことはなかつた。僕らはかういふ四畳半の一間にこの小さい長火鉢を据ゑ、太平無事（たいへいぶじ）に暮らしてゐた。あの借家（しやくや）も今では震災のた

めに跡かたちもなくなつてゐることであらう。

（大正十四年十二月）

す。